

児玉 花外（こだま・かがい）

1、プロフィール

明治 30 年代から 40 年代にかけての社会主義詩人グループの代表的存在。明治 36 年、『社会主義詩集』は安寧秩序を害するという理由で発売禁止となった。

<生没>

1874(明治7)年7月7日 ~ 1943(昭和 18)年9月 20 日

<代表作>

『社会主義詩集』『花外詩集』詩集『ゆく雲』

<青森との関わり>

大正 12 年秋から 13 年春にかけて鳶温泉に滞在、大町桂月と冬籠りする。その間「東奥日報」に詩を発表している。

2、作家解説

京都生まれ。本名伝八。小学校卒業後、同志社予備学校、仙台東華学校、札幌農学校予科、東京専門学校等に学んだがいずれも中退におわった。

明治 27 年ごろイギリスの詩人バイロンやバーンズなどに傾倒して詩作を始めたが、西川光次郎、片山潜らを通じて社会主義に関心を抱き、少年工、女工、労働者、小動物などの哀れな存在に心寄せてうたった。これらの詩は「東京独立雑誌」「労働世界」「社会主義」「新小説」「早稲田文学」その他、多くの雑誌や新聞に掲載された。32 年6月、文学同志会から出版された山田枯柳、山本露葉との共著『風月万象』を第1詩集として、以後『社会主義詩集』『花外詩集』(明治 37 年2月)『ゆく雲』『天風魔帆』(明治 40 年1月)などがある。このほか随想集、伝記物語などの著書 10 数冊。一時期、新聞雑誌記者や詩選者として後進を指導。小説にも筆を染めたが成功しなかった。晩年は軍国調の詩を作ったりもした。なお、明治大学の校歌作詞者としても知られている。

青森県には大正 12 年秋から大正 13 年春にかけて蔦温泉に滞在している。大正 12 年 10 月 10 日の「東奥日報」に「十和田だより」として「新体詩人として名ある文壇の熱血漢児玉花外氏は今回東京大震災に罹災せられ候処此の火災に焼けたされ候を機会として北海道に渡られ彼の地を約二旬間御漫遊致され二、三日前彼の地より帰来、目下当地の蔦温泉に滞在悠々閑風月に親しみ居り候。蔦温泉には近く桂月先生もご来着此の地に冬籠りして杉浦天台道士の伝記著作に没頭の筈、児玉氏も相共に来春まで此の地に籠りて世喧を避け専念作詩筆硯に親しまれ候筈に候……」と記されてある。滞在中は桂月や地元の小笠原臥雲（松次郎）、鈴木敏吉（沢田小学校校長）、和田政吉（同校訓導）らと交遊、十和田湖にも足を運んでいる。詩作品は「東奥日報」に発表、50 編に及ぶ。また法奥小学校校歌の作詞などもてがけている。

3、資料紹介

○『旗と林檎の国』

図書

1970(昭和 45)年 12 月 10 日

195mm × 135mm

蔦温泉滞在中、大正 12 年 10 月より大正 13 年 4 月にかけて「東奥日報」に発表した詩 50 編、及び付録として蔦滞在中に作った校歌や桂月を詠んだ詩をも収める。どの詩も県内を詠んだものであり県外の文人がこれほど多く県内のことを詠んだ詩を発表した例はない。